
全てに裏切られても

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全てに裏切られても

【Nコード】

N1495Q

【作者名】

mine

【あらすじ】

「ふざけんじゃねえ！絶対に…絶対に、俺は信じねえぞ！」

ある日、灰原哀は江戸川コナンに『APT X 4869』の解毒剤を置いて行き、米花町を去ろうとした―が、コナンに止められてしまふ…

しかし、それは全ての暗黒への始まりだった―

かけがえの無い、大切な物に裏切られた時、あなたならどうしますか？

原作崩壊ですが、それでもいい方はどうぞ！

暗黒への扉

「どうして…何で来たのよ!？」

「バーロー…絶対に、お前が…あんな簡単にそんな覚悟を決めるよ
うな、人間じゃねえ事は、分かってんだからな…」

「…ふざけないで。私は裏切ったの。組織に寝返ったの!だから…
早く戻って!あなたの家に置いて行っただしょう!?!元の姿に戻る
ための、A P T X 4 8 6 9の解毒剤が…そして、もうあなたはこの
組織に関わる必要は無い!だから、もう…私の事なんて、忘れてよ
…」

間違っても、言えない。

—本当はあなたの周りが、敵だらけだなんて。

でも、彼の瞳は全く揺るがなかった。

その時、彼に止められて、決心が揺らいでしまった―それが、暗黒の始まりだった―

暗黒への扉（後書き）

その内、分かってくるようになりますがこのシーンは実は冒頭シーンではないです。どういふ事は後々…

疑惑の保険証

「はあ…面倒だ。」

この日は、蘭は園子と遊びに出かけてしまい、コナンは学校。小五郎は部屋の掃除をする羽目になっていた。

「もししなかったら…今月はお酒は絶対に飲ませないから！」

と、蘭に強く言われていたのだ。

まあそれも仕方ない。2カ月前から先延ばしにしていた為に、部屋の中はとんでもない有様だったのだ。こんな状態で依頼者が来るはずがない。

3時間ほど経ったが、慣れていない作業という事、そしてあまりの汚さのせいで、全く終わりそうになかった。

「っと…保険証落ちてやがる……？」

拾い上げた袋から、保険証を取り出した小五郎は違和感を感じた。

（なんだこりゃ…知らない奴だな…一体誰の…っ）

袋の中に、もう一枚の写真。

そう、これは――

「蘭……？」

疑惑の保険証（後書き）

まだ謎だらけの展開ですが、その内分かるようになります。

工藤新一暗殺令

さて、この日はコナンは日曜日にも関わらず学校に行っていた。地域の小学生が参加する活動が日曜日に開催される為だ。

勿論、コナンはうんざりしていた。高校生が何故、清掃活動なんかをしなければならないのか。せつかくの連休が、分解されるのは全然嬉しい事ではない。

「コナン君！ちゃんとやって下さいよ……」

「そうだぞ！一人だけサボるのはずるいぞ！」

「くっそ……呆れる……ん？あれ……和葉お姉ちゃん！？」

何と、街中で和葉をコナンは発見した。

「あつ……コナン君やない……と、皆も！久しぶりやな！」

「和葉ちゃん……どうしたの……あつ！コナン君！」

「ら、蘭姉ちゃんも……」

「おーい！その子達！ちゃんとやりなさい！！」

コナン達は、担当の係の人に気づかれたようだ。

「行かなくちゃいけないみたいね。」

「う、うん。それじゃあ、またね蘭姉ちゃん。」

「うん。それじゃ、行こっか。」

「そやね…って！良く考えたら、うちら園子ちゃん探してるんやなかった！？」

「あーっ！！！」

「あっちも…忙しそうね。」

「ああ…そうだな。」

「早く、コナン君も、哀ちゃんも行こう！」

歩美の元気な声。

こんなに平和なのに。この後、とてつもない真実を知る事になるなんて、分らなかった―灰原には。

~~~~~

「ただいま…博士…あら？」

帰ってきた灰原だったが、鍵は開いているのに誰もいなかった。

「もう…博士…たら…」

哀が愚痴ったその瞬間、一人の女性が地下室から上がって来た。

「おっ！哀ちゃん、帰って来たんやな？」

和葉だった。

「あ…和葉、お姉さん…」

「もう…まだ気づいてへんの…?」

しかし、和葉は呆れたような、いつもは全く見せない表情を見せている。

「え?」

「ふふっ…もう、本当に相変わらず可愛いんやから…」

「な、何…が?」

その瞬間、灰原は一步退き下がる。

あの感覚。組織のメンバーだけが発する、特殊な威圧感――

同じ物を、和葉から感じたのだ。

「あなた…一体…」

カチャ…

「っ！」

「そ、もう分かったやろ…うちが暗殺する時によつ使ったんやから…」

しかし、何とか灰原も誤魔化そうとして見せる。  
「な、何を言ってるのかしら？暗殺？ふざけないで…あなたみたいな高校生が、そんな事をするはずが—」

ピシュッ

「っ…」

緋色の液体が、飛び散った。

「それでも、まだ信じられへんの？」

激痛が、灰原の右足に走る。

「…やめ…てっ…」

「そやね。まあ、これ以上傷つけても、あんま意味あらへんし…これぐらいにしておくけど、一つ、要件だけ伝えとくわ…」

彼女の見える、その表情は既に輝きを失っていた。

「工藤新一を、暗殺する事…期限は、3ヶ月以内や。」

## 銀の弾丸を巡って

「それで…心当たりが無いか、って事ね。」

「ああ…いくらなんでも、偶然にしては可笑しすぎる…どうだ？」

小五郎は直接、妃英理の自宅へ向かい、見つけた写真の人物について訊ねていた。ここ2週間、蘭の元へよくやってきていた英理なら、何か知っているのではないかと考えたのだ。

「…残念だけど、心当たりは無いわね…」

「そうか…」

「恐らく、依頼人の中に、それを落としていった人がいるんじゃないかしら？」

英理は、出任せを放つ。

「が、小五郎は疑う気配も無い。まあ、この状況で疑えという方が、不可能だろうが…」

「そうだな…それしか考えられないよな。悪いな…こんな事でいちいち聞きに来て…そうだ。これから、どうか行かねえか？」

「そうね…」

だが、英理は断った。

「ごめんなさい。これからちょっとやらなくちゃいけない事があるから…また今度にしてくれるかしら？」

「あ、ああ。分かった…それじゃあ、またな。」

ガチャ

ピッピッピッ…

プルルル…

「はい。」

「ガリアーノ？ちよつと時間取るけど…大丈夫かしら？」

「ええけど…どないしたん？」

落ち着き払って、英理は声を発する。

「今ね、ちよつと…来たのよ。彼が…」

「え？小五郎探偵？」

「ええ。それで…ちよつと、厄介な事になってね。何故か…」

英理は、丁寧に顛末を電話の相手に話した。

「へえ…そりや大変やな。で？どないするん…これから。」  
「まあ…バレないと思うけど…でも、あそこには銀の弾丸<sup>シルバーブレット</sup>もいるから…」

「あー」と、気が抜けたような声を電話の相手は返す。

「ちょっと…不安になってね。」

「まあ…氣い付けるんやで？ジンに襲われたら、あんたじゃ対抗できへんやろ？」

「…分かってるわ。ごめんなさいね…時間とって。」

「氣にせんという…あっ！そやそや。一応言っとくで…メスカル。」

「どうしたの？」と英理は、聞き返す。

「さっき、シェリーにあれ言うといたから。アクアビットの失敗分、ちゃんと取り戻したって事、言うとかで。」

「……分かったわ。」

ピッ

ゆっくりと、英理は周りを見渡してみる。

いつも目に入るのは、小五郎と、蘭と、自分が写っている写真。

「……騙し続けるのね。これからも……」

~~~~~

「ただいま。蘭。」

しかし、戻ってきた途端に、モップを投げつけられた。

「何やってたのよ！！まだ掃除終わってないじゃない！！！！」

「あ、ああ…すまん。」

「『すまん』じゃないでしょ！？とにかく、早くやりなさい！！」

抗う事は、勿論出来ない。

「へーへー…くそっ…おい、それより夕飯はいつだ？」

しかし、蘭は呆れたように小五郎に落ち着いて告げる。

「今、9時です。何の連絡もよこさない人の分の夕食はありません。」

そして、背を向けて自室へと入っていつてしまった。

「はぁ…おい。コナン…」

「え…」

という事で、すぐ近くでたまたまテレビを見ていたコナンに白羽の矢が立った。

「悪いが、カップ麺…買って来てくれ。残りは小遣いにしていいから…」

最初は、コナンも断ろうと思ったが、何故か小五郎が10000円札を渡したので、残りを推理小説代の足しにしようと考え、元気な声で返答した。

「はい。」

が、蘭がそれを認めるはずは無い。

「ダメよ！子供をこんな時間に外に出していいわけじゃないでしょ!？」

「…だとき。」

「大丈夫だよ。僕、早く買ってくる!!!」

すると、蘭も焦って部屋を飛び出た。

「ちょっと！待ちなさい！！」

しかし、追いかけようとしたがもうコナンの姿は見えなくなっていた。

「もう…全く。お父さん？コナン君にそこまでさせるんだから…ちやんと掃除終わらせるのよ？」

「は、はい…」

ガチャ

（新一…大丈夫…守るから…）

銀の弾丸を巡って（後書き）

最後は… 謎な展開を呼び込んでますね。

裏切り者の感情

「出来…た…」

完成した。

ようやく…完成した。

でも…どうして？

どうして…喜べないの？

素直に…喜びたいのに。

「哀ちゃん……」

「哀ちゃん……」

~~~~~

why  
:  
:

「哀ちゃん？」

はっと顔を上げる。

授業中だった。

「どうしたの…哀ちゃん？具合でも悪いの？」

手元を見ると、全て解き終えた九九の問題プリントがある。中に少し応用問題らしき物も混ざっているが。

「いいえ…全部終わっちゃったから、眠くなって寝てただけよ…ごめんなさい。迷惑掛けて…」

「えっ！？灰原さん全部終わっちゃったんですか！？こんなに量が多いのに！？」

「すげえよ！灰原…」

周りからは、驚愕の声が上がる。

「まあ、そりゃそうだよな、灰原。九九なんて…」

「え…ええ…」

疲れていただけかもしれない。そう、灰原は自分で思い込んで見せ

る。

あれから1週間が経った。もう絶望的な状況だが、灰原には幸運な事もあった。そう、解毒剤が出来上がったのだ。

研究に研究を重ねて、長い間努力した結果であった。だが、それでも喜べない…

『工藤新一を、暗殺する事…期限は、3ヶ月以内や。』

何度でも、この言葉が蘇ってくるから。

あの日、帰ってきた博士に傷を見られ、理由を聞かれたが誤魔化してしまった。

とても、素直には言えない。

『和葉が組織のメンバー』である事は。彼女が、自分達を裏切っていた事は。

言ったら、どうなる事か…自分に重ねてみれば、すぐに想像できる。また灰原も裏切り者だから。

だから言わない。

それが、裏切り者の感情。

## 向かい合う二人

ガチャ

「ただいまー！お父さん…」

「おお、和葉か…」

「なあ、あいつから連絡来てへん？」

「さあ…忘れてもうたわ。」

「…あのなあ。忘れるって、いくらなんでもそれは酷いんとちゃう？そいつの連絡はちゃんと確認しとけ言ってるやん…」

しかし、すぐに銀司郎は笑った。

「はっは…冗談や冗談。来とったで。ただ、相当怒ってたな…」

「そりゃそうやろ…うちはシェリーの正体知ってるのに、ジンには『知ってる』としか言ってないんやからな…分かった。とりあえず、いつもの場所に行つて来るわ。」

「氣い付けるんやぞ…奴なら、いつお前を殺すかは分からへんからな…」

しかし、和葉は笑顔で出て行つた。

「大丈夫やって！うちが殺されるわけないやろ…ほな、行ってきまーす！」

~~~~~

「ジン？来たで？」

草の茂みの中から、ゆっくりとジンは出て来る。

「フン…相変わらず、警戒はしてるみたいだな…」

「それはそつちもやろ…いつでも撃てる用意は出来てるくせに。」

静かに、ジンは舌打ちする。和葉には聞こえない程度に。

「とにかく…シェリーの正体、早く教えてもらおうか。」

「ダメや。ダメ。どうせあんた、手柄取る気やろ？うちやって馬鹿やないで…」

「五月蠅い。元々は俺の任務だろうが…お前は、学園生活を満喫してりゃいいんだよ…今はな。」

齒軋りするジン。逆に、和葉は至って冷静だ。

「…テメエ…誰のお陰で今、生きていると思ってる？」

「え？お父さんに決まってるやろ…あんたに感謝しなきゃいけへん事なんて、あつた？」

パン

「なっ…」

「つと！危ない危ない…」

ジンは驚愕する。隠し持っていた拳銃で、足元を撃ち抜いたはずが、軽く避けられていたのだから。

「ま、仲良くしょ？あんまりあんたとやり合いたくあらへんし…それに。」

見·ち·や·い·け·な·い·人·間·が·、·こ·れ·を·見·て·る·み·た·い·や·し·、·な·…

目の当たりにした真の姿

平次は立ち尽くしていた。

銀髪で背が高く、全身に黒い服を纏い、それでいてさらに冷血―話している女性がその男をジンと呼んでいた事から、間違いなく工藤新一の言っていた通り、それはジンなのだろう。

だが、その話している女性だけは、信じられない人物だった。

「なっ…」

「あれ？ジン、気づいてなかったん？…感覚が鈍ってきたんやないの？」

「五月蠅え！お前に言われる筋合いは―っ！」

飛んできた刃を、素早くジンはかわす。

「前言撤回。まだ動きは十分問題あらへんな…さて。」

「平次？出てきてええよ…あんたは、死なずに済むんやから…」

覚悟を決めて、平次はゆつくりと陰から現れた。

「どついつ事や…和葉。」

和葉は、この状況でも笑って見せる。

「どついつ事…って、決まってるやん。うちが、黒の組織のメンバーやって、聞いてたら分かるやろ？それぐらい…」

勿論、平次が信じられるはずは無い。

たまたま、事件を解決した後に、和葉の家に寄ろうとして、こんな場面に出くわしてしまったのだから。

それも、近道―人通りの少ない裏道を通ろうとして、こうなったのだから。

余りにも、偶然が重なって、見てしまった物が、これだなんて。

「…嘘やろ？なあ…和葉。お前…じゃあ、言ってみろ！その奥の男は、その男の―」

一気に、怒り狂う平次の言葉を、静かに和葉は遮った。

「ジン―もう、結構長い付き合いやで？まあ、お父さんが一番世話になってたんやけど…それと、うちにはジンも逆らえへん―」

「勝手に変な事を言うんじゃないやねえ…ぶっ殺すぞ。」

「もう…ジン…でも、殺せないやろ？まあ、勿論あんたなんかには殺されるはずはないんじゃないけど、もっとちゃんとした理由で…な。」

平次の脳内では、この二人は何かしらの信頼関係が築かれている事は、すぐに理解できた。

お互いが、お互いの事を認め合っていて、修羅場も結構潜り抜けているみたいだった。

しかし、心の方は全く付いていけない。ただただ、目の当たりにした現状に、絶望するだけ。

「んな…アホな…そんな事が…」

「とりあえず、平次…今は邪魔やし…」

お休み…

素早く平次は構えるも、和葉のとてつもない速度の動きの前には、無力だった。

そして、考える余裕も無く平次は眠らされる。

「まず、一人…」

アクアビット

啞然とした。久々に会えた彼女は結構変わっていた。

最初は気付かなかったけど、相変わらず演技が上手いんだって。

だけど、そんな彼女は私にとてつもない命令を下したの…

「死んだはずの工藤新一が、まだ生きてるかもしれない…しかも、この近くにな。」

まだ、新一は死んでない―そう私は信じてた。あそこに連れだしたのは私なのに…

誘い出して、ああやって怪しい人間を見つけたら、間違いなく新一はそれを追いかけるだろう、って。そう言われて、私は指示通りに空手の都大会で優勝し、新一をトロピカルランドへと誘い、ジンとウォッカを目撃させた…

従うしかなかった…お父さんと、お母さんの命がかかってたから…

でも、その新一がまだ死んでないかもしれないって―

そして、もう大体答えは分かってる…多分、新一は―コナン君なんだ。

だけど、それだけじゃなかったの。私への指示は、もう一つあった。『シェリー…あんた、結構仲良かったやろ？まあ、あっちはあんたの正体には氣い付いてないみたいやけど…こっちはうちもまだ見当がついてなくてなあ…必ず見つけてや。』

これも、すぐに分かった。コナン君と密接な関係を持つ人物―哀ちゃんしかない。

だけど、どっちも言わなかった。私は。

でも、結局はバレてしまった。無駄だった。
コナン君が、無防備にも推理小説をソファで熱中して読んでいる所を、見られたの。

そうよね。彼女だって知ってるんだもの…幼い頃の、新一を。

決めたよ。私は…絶対に、二人とも守るんだって…でも、でも…出来るのかな？私なんか…

無理かな？

「蘭お姉ちゃん…？」

あ、コナン君…

「コナン君？どうしたの…」

「え？う、うん。お休みって言ってたけど、何だか考え込んでるみたいだったから、少し心配になっちゃって…」

…ごめんね。新一…それは私のせいなの。

本当に…ごめんね。

「べ、別に大したことじゃないから。でも、ありがとう。コナン君…」

これしか言えないの…ごめんね。

「うん。じゃあ、お休み！」

「うん、お休み…」

…一人じゃ無理だ。何も出来っこない…

~~~~~

ピンポン…

「はい…あつ…蘭さん……」

翌日、蘭は直接阿笠邸を訪ねた。

「こんにちは…哀ちゃん。あれ？博士は…？」  
「え、ええ。ちよつと用事で出かけて……っ」

ボタン

素早く、蘭はドアを閉めた。

「ちよつ…何を…」

「…お願い—助けて…」

蘭は、頼るしかなかった。たった一つの望みに。

「え……」

「もういいよ……これ以上誤魔化さなくたって……志保っ……」

灰原は啞然としていた。何故、目の前にいるこの女性が、自分の正体を知っているのか？

「……志保……会いたかった……」

しかし、灰原は顔を逸らした。

「何言ってるの？志保って誰？あなたの親友？それともあなたの血縁？誰なの一体？」

「……何、で？」

が、既にその時蘭の眼中に写っていたのは全く別の物だった。

「だから、私は――」

「何で、あなた…その傷…ガリアーノにやられたの!？」

「っ!！」

灰原もようやく理解する。この傷をガリアーノが操る暗器によって出来た物と判断できて、宮野志保の知り合いだとしたら…彼女しかない。

「アクアビット」

## アクアビット（後書き）

今回書いた「あれが蘭によって組まれた状況だとしたら……」が  
この小説の軸ネタです。

## 閉塞感と後悔

彼女の操る暗器には、2種類あるの。

一つは暗殺時に使う物。そして、もう一つは脅迫時に使う物―私の足を軽く裂いたのは後者。

暗殺時は主にスぺツナズ・ナイフを、改良した物。これは刀身の射出が可能な特殊な短剣。基本的には彼女はこれに毒を塗って使うの……腕は正に一流。

そして、脅迫時は投擲用の超小型ナイフを操る。こっちの方が更に扱いに手馴れていて、隠し場所も様々よ。

これは切れ味が良すぎる為、血液が飛び散るからあまり暗殺には使わないみたい……足元を切り裂いて、行動を不能にするのに良く使ってるらしいわ……

そういえば……彼女は拳銃は使わない。腕はそんなに悪くないんだけど……

だけど、何かしらの事情があるらしくて、基本的には使わない。

これを知っているのは、彼女の知り合いの中でも、極一部。私なんかはその毒の開発に少し携わった時に教えてもらったわ……

だから、私の周辺にそれを知る人間はいないはず…

なのに、今日の前にいる彼女がーガリアーノの事を知っている…何故？

~~~~~

「何で…あなたがそれを…」

ただただ、灰原は驚きを隠せないでいる。と同時に、またしても組織のメンバーが身の回りに存在した事にとてつもないショックを覚えた。

そんな灰原を見ていたのか、見ていないのか。蘭はただただ、消え入るような声で言う。

「中学生の時に、お母さんの事を知ったんだ……お父さんと別れてから、何かに関与してるって……だから、それを知っちゃった私は……組織に入れられて……半年前に、『工藤新一を消す』仕事に関与したの……」
「っ……」

灰原も、何故工藤新一がトロピカルランドにいたかについてはコナンから話を聞いていた。

蘭の空手の都大会優勝祝いだっただが、その時に組織の怪しい取引現場を目撃して、それに夢中になっていたために、背後から近付いてくるジンに全く気付かなかったのだ……

だが、この時理解した。蘭とジンにもまた、関係性があつたのだ。

これで、まず組織のメンバーが三人増えた。

英理に、和葉に、蘭……まだいるかもしれない。

それだけで、灰原は十分絶望に叩き落された。
先が、何も見えなくなつた。

「ねえ…哀ちゃん…」

「近…か…」

「え？」

ほとんど聞こえなかった蘭はもう一度聞き返すが、次の灰原の言葉は――

「近付かないで！あなたみたいな人間と…関わりたくもない！ダメ…来ないで！！」

完全に、組織のメンバーに対する姿勢だった。

「あ…」

「っ…ごめんなさいね。とにかく、今日は帰って頂戴……」

地下室へと降りていく灰原は、最後に一言呟いた。

「あなたとは…もっと別の形で会いたかった……普通の人間として…」

一人取り残された蘭に残った物は――後悔。

サヨウナラ

カタカタカタ…

室内には、テンポ良く一人の少女がディスプレイ上に文字を並べていく音しか聞こえていない。

ただ、そのディスプレイを見た者は誰でも驚愕するだろう―いや、確かに彼女が解毒剤の研究をしている時はその画面を見れば誰もが驚くだろうが、今はそういう事ではなかった。

「工藤君へ。

解毒剤は、昨日完成したわ。だから、今日はどうしてあなたに届けに来たの。

それと、一つ言っておくわ。私は組織に寝返ったの…ごめんなさいね。これまで騙してて…着々と、戻る用意は進めていたの。それじゃ、さようなら…

P.S.

あなたの事、そんなに嫌いでもなかった。

~~~~~

灰原

ピンポン

丁度、蘭は昼食を作っていて、コナンは自室で推理小説を読みふけていた。

ドアを蘭が、開けるとそこに立っていたのは……  
「はい……あ、哀ちゃん？どうしたの？……っ」

蘭はそう言ってから、後悔した。自然とその言葉が出てしまったのだ。いつもの、彼女の接し方で接してしまった。

「江戸川君……いらっしゃいますか？」しかし、それでも灰原は至って冷静だった。

「コナン君ね。ちょっと待ってて……コナン君！哀ちゃんが来てるわよ！」

奥から、「はい」と、子供の声で返事が聞こえる。

だが、これを聞くのもこれで最後になるんだろう……そう灰原は感じ

ていた。

~~~~~

「お、灰原。どうした？」

「いえ…ちょっとね。博士から、あなたに。」

そう言って、私は彼に小包みを渡す…本当に、卑怯者ね…私。

「博士忙しいのか？」

「ええ。まあ、ね…」

一瞬、彼が私の顔を覗き込んでくる。

「何よ…」

「いや………」

早く…ここを立ち去りたい…

「それじゃあ、私も帰るから…」

「ちょっと待てよ。」

何…？

「お前、何悩んでんだ？」

「えっ！？」

バレてる…？理解されてる…？

まさか。そんなはずは…

「また、どうでもいい事で悩んでんだろうけどよ…博士にでも相談したらいいんじゃないのか？」

そうよね。彼は探偵…私の様子がおかしければ、すぐにでも分かるのよね…

「そうね。相談させてもらうわ…」

でも、その博士に会えるのも、私が刑務所に行った場合のみだけど…

「あ、ああ…じゃあな。」

「ええ。また…」

そう、もう二度と会えないけど―僅かな、楽しい時間を本当に…本当に…

ダメ。これ以上思い出したら。戻りたくなる…

何とか、彼女に頼むしかない―私が、組織に戻れば何かしらの条件を提示してくれるかもしれないから―

とにかく―さようなら…工藤君。

サヨウナラ…皆。

守るべき物

「あれ？哀ちゃんから小包み？」

「ううん。博士だって……」

すると、コナンはとりあえず自室に戻ってから、中身を開けてみる。

すると、また二つの箱が出て来た。

「何なんだよ博士……こんなに面倒な事しなくたっていいじゃねえか……っ！」

しかし、片方の箱の裏に貼り付けてあった紙には——こう書かれていた。

『A P T X 4 8 6 9 の解毒剤』

もう片方の箱は開けるまでもなかった。

灰原が―この町を去ろうとしている。即座にコナンはそう推理した。もう片方の箱に入っているのは『お別れのメッセージ』らしき物だと。

だから、悩んでいるような表情を見せていたのだと。

そして、その瞬間コナンは部屋を飛び出していた。

「ちよっ！コナン君！」

「ごめん、蘭姉ちゃん！お昼は僕いらないから！」

コナンが階段を駆け降りた瞬間、目の前のタクシーが一台そこを発車していった。

それを追跡する為に、コナンはスケボーへと両足を乗せた…

~~~~~

「くそっ……間に合え！間に合え！！」

コナンの前方約50m。距離は相変わらずだ。

だが、間違いなくコナンは絶体絶命の状況にあった。タクシーは高速道路へと向かっていたのだ。

入れば阿笠博士が用事で出掛けている今、追跡は不可能。

だから、絶対にそれまでに信号に引っ掛かるのを待つしかなかった。  
だが、一度も引っ掛かる気配は無く…そのまま、高速道路へ―

「っ！コナン君！？」

しかし、そこに救世主はいた。

「ジョディ先生！！そうだ！一度止まって！すぐに飛び乗るから…  
そして、前の車を追跡して！！！」

コナンが力の限り叫ぶと、ジョディは一度車を止めた。

すぐにコナンが助手席へと乗り込み、再度発車した。

「ふう…それで？前の車は一体…」

「うん、それ、が…灰原、が…」

息を切らしながらも、コナンはジョディに事情を説明していった。  
勿論、幼児化現象については抜きで。

「なるほどね…分かったわ。とにかく哀ちゃんを今は追いかけるしかないのね？」

「うん。とにかく、絶対に見失わないようにして…っ…」

すると、次のインターチェンジで灰原は降りた。

「追いかけて。」

「ええ。分かってる…」

そして、インターチェンジを抜けた所で、灰原が乗っていたタクシーが止まっている駐車場をコナンは発見したのだ。

灰原がゆっくりとタクシーを降りた。

「灰原：お前、どうしたんだ？」

## 守るべき物（後書き）

ようやく第1話に接合しました……

次回から1章です。よろしく願いますm——（ m

## 悪夢の始まり―地下室（前書き）

守るべき物とこの話の間に第1話が入ります…

## 悪夢の始まり―地下室

「そう、ね……ごめんなさい……」

灰原のその言葉を聞いて、静かにコナンは微笑んだ。

灰原はこうして再び米花町に戻ってきた―これが悪夢の始まりだとも知らずに。

~~~~~

「ん……」

平次は飛び起きた。

「どうじゃ……」

何も置いていない、広い部屋。

牢獄では無さそうだが、閉じ込められているのはすぐに分かった。

そう―『扉が無い』

「おっ！やつと起きたんやな。」

はつと上を見上げると…スピーカーが設置されていた。

声の主は、勿論和葉だ……

「和葉…おい！ここ…どこ―」

「ああ、そこは―とあるホテルの、隠し部屋。」

「何…やと？」

「フフツ…平次、待っててな。」

それだけ言うと、スピーカーの電源を和葉は切ってしまった。

「待ってて…って。まさか…隠し扉があるんか？」

「ピンポン。大正解や…平次。」

すると、完全に壁に同化していた扉が開き、そこから和葉が現れた。

「な…」

「とりあえず、平次。着いてきて。」

僅かな可能性を信じたかった。もし和葉が何者かの変装だとしたら…そう。ベルモットの変装だとしたら、和葉を救出すれば逆にFBIとの連携次第では大チャンスにも成り得る。

だが、勿論その可能性はほぼ0に近い。そんな罠に平次をはめようとしてるなら、直接平次を捕らえた方が早い。だから、この和葉は本物の和葉であると考えた方がいい…そう平次は推理した。

絶望を感じながらも、ここに留まろうとしても死ぬだろうと考えた平次は、着いていく事に決めた。

着いて行つた先に

扉を開けると―そこはホテルの一室だった。

「ここは…」

「地下6階。まあ客室は地下3階までやけど…その下に作られてい
る階層や。主に組織のメンバーは関西での活動時はここに泊まる事
が多いんや。経営者は、うち。」

平次は驚愕する。

「お前…やと!?!」

だが、逆に和葉はさも当たり前のように頷いて見せた。

「何か問題でもあるん?」

「いや…別に、あらへんけど。」

「ほんなら、あんたの部屋はB612やから…一つ言っとくけど、
その部屋はちゃんと監視カメラついてるんやから……足搔いてとも
無駄やで?」

そう言いながら和葉は平次に鍵を軽く投げる。

「ほんじゃ、うちは上の階にいるから、何か用あったら来てな。」

「あ、ああ…」

和葉が去ってから、B 6 1 2のドアを開ける。

明かりをつけると、ゆったりとしたシングルベッドが目に入る。
そして、TV、エアコン、冷蔵庫、洗面用具一式、電話回線さらにはインターネット回線まで繋がっている。良くありがちなシングルルームだった。

また、内線番号を見ると、食事の注文等も可能になっていた…
そう。完全にこのホテルは組織の為に作られているのだ。

恐らく、料理長も組織の息がかかった者達なのだろう…どれだけ大きい組織なのか。

だが、そんな事より平次が気になっていたのは…隣の部屋、B 6 1
1から聞こえる奇妙な音だった。

「うるさいなあ……」

そう呟いた瞬間に、叫び声が聞こえた。

「くそがあああ……！ベルモットめえええ……！！！」

その大声に驚く余り、平次はベッドへと倒れこんだ。

「な、何や……？」

すぐに起き上がって、ドアを開け、隣の部屋をノックする。

「おい！どないしたん……？」

ガチャ

カチャ……

「誰だい？あんた……」

平次はその女にライフルを突きつけられていた…

深まる謎

「誰だい…あんだ。」

平次の額に冷たい鉄の物体が接触している。

その物体の先端は黒く光り、穴が開いている―銃口だ。

「あ、いや…それは…」

しかし、キャンティはここで何かをはっと思い出した。

「ああ…そういえば…ガリアーノ様が一人小僧を連れてきた、って
言ってたわね…」

（ガリアーノ…？それに「様」って…まさか！？おいおい！ベルモ
ットっちゅう奴はボスの側近…ガリアーノはボスの名称やないか！
？）

そして、キャンティは銃を下ろした。

「ごめんなさいね。私はキャンティ…まさかあなたがそうだとは知
らなかったわ…さっきの叫び声に反応して来たんでしょ？」

「え、ああ……」

「まあ、仕方ないわね…とりあえず、ごめんなさい。」

するとキャンティはすぐに部屋に戻りドアを閉めようとした――

「ちょ、待ち――！」

「何かしら……」

「ガリアーノ……って、あんたらのリーダーなんか？」

ダメ元で聞いてみる。答えてはくれないだろうと分かっているがらも。

「……残念だけど、それは言えないわ。」

そして、静かにキャンティはドアを閉めた。

この時、とてつもない違和感が平次に残った。

まず、何故自分のような民間人に対しても「こんなにも冷静な態度を取る」のだろうか？

組織の正体がバレる事だけは常に許されないはず……本来なら即座に射殺するに違いない。

とすると、よほどガリアーノという存在を信頼しているのだと分かる。

じゃあ、そのガリアーノは誰か？

ボスなのか、それともベルモット同様ボスの側近なのか、それともそれ以下か。

謎は深まるばかり……勿論、その後疲れ果てていた平次は、すぐにベッドに入ってしまったのだが…

深まる謎（後書き）

何故、キャンティがこんなに口調が改まっているのか…これもまた謎です。

FBI（前書き）

一度、東京側に戻します。

FBI

「何だと……それって……」

その日の晩、阿笠邸で灰原は、コナンに事態を説明した。それでも一番大切な『毛利蘭が黒の組織のメンバーである事』『組織に工藤新一の暗殺を命じられている事』は絶対に話さないのだが。ただ、和葉の事だけは説明した。

「そうか……」

「工藤君……信じられる？」

灰原は訊ねる。少なくとも、自分自身はそんな事は信じられない。あんなに優しそだった人が、いきなり豹変したような態度を取るなんて事は絶対に考えたくは無かった。

「いや……俺も、まだ半信半疑だよ……絶対に、考えたくもねえ事だ……」

勿論、またコナンも同様だった。

「ねえ、工藤君……」

「ああ。すると……服部が危ねえかもしれない……だけど、間違っても服部にそれを言うわけにはいかねえし……直接、和葉ちゃん……いや、ガリアーノに聞いてみるしかねえか……」

灰原はコナンに「和葉が組織のメンバーであるという事は、先日この町に来た時の彼女の『ジン』へ電話していた事で知った。」と伝

えてあった。何故か自分が彼女に裂かれたのだという事は言わなかった。

「でも、工藤君。直接聞いてみるって言っても…彼女の武術の腕はかなりの物だし、そう上手くいかないんじゃないかしら…分かったとしても、その場で殺される可能性も有り得るわ…」

「そうだな。確かに…焦るのはよくねえかもしれねえけど…そうだ。FBIのジョーディ先生には連絡入れておくかな…」

灰原は納得する。FBIなら確かに信頼できそうだ。

「そうね…それじゃあ、内容は私が話すから、電話かけたら代わってくれる？」（それなら…大丈夫。FBIからそんな簡単に情報が漏れる事も無いでしょうし…）

すると、その場でコナンは携帯でジョーディ先生に電話した。

「もしもし？」

「あら。コナン君…あなたから連絡があったって事は…」

「うん。ちょっと厄介な事になっててね…ちょっと、灰原に変わるから、話聞いてくれる？」

「ええ。いいわ…」

「哀ちゃんかしら……」

「はい。お久しぶりです。」

「それより、ちょっと大変な事になってるみたいね。」

「え、ええ……」

すると、灰原は少し声を落とす。幸運にもコナンは「トイレ行つて来る」と言つて、一時的にその場を離れていた。

（ちょっとどころじゃないの……本当にヤバい状況に今、私達は置かれているの……）

~~~~~

（それ、本当？）

（ええ。アクアビットも、ガリアーノもちゃんと確認は本人に取っ  
ておいたわ…まだアクアビットの母親の方が分からないんだけど。）

ジヨディは舌打ちする。少し、自らにも失態があつた。

毛利蘭…高校の教員に一時的に就いていた時に、彼女から組織の気  
配を全く感じ取る事が出来なかった事だ。気付いていれば、こんな  
危機も未然に防げたかもしれない上、上手くいけば組織を潰せたの  
ではないか、と思った。

（分かったわ…）

そして、灰原は時計を見る。そろそろ5分…コナンも、さほど経た  
ない内にトイレから出て来るだろう…

（…とりあえず、個人個人の特徴については…今週、土曜日空いて  
るかしら？）

ジヨディはスケジュールを確認してみる。

（ええ。大丈夫よ…それじゃあ、何処で落ち合う？）

（そうね…米花町から離れた………っていう喫茶店とかどうかしら。  
）

（OK。それじゃあ、またね。この事はちゃんとFBI内で秘密に  
するから—）

（待って！）

その時、自然と灰原はジョディの言葉に反応した。

FBI内で秘密にする。この言葉に、信用を感じることが出来なかったのだ。

（何か…問題でもあったの？）

（いえ…少し。もし、FBI内にスパイがいた時の事を考えたくて…ごめんなさいね。今の忘れて―）

しかし、今度はジョディがそれに納得した。

（いいえ…ナイスよ。哀ちゃん…確かに、その可能性は考えられるわ…分かった。とりあえず次会う時までには私だけの秘密にしておくから…それじゃあ、また。）

（ええ…また。）

ピッ…

「おい！灰原！」

「工藤君…」

コナンが駆け寄ってきた。

「ちゃんと、連絡したか？」

「ええ。きつちりね…」

「それで、何か言ってたか？」

「『あんまり首を突っ込まないように』って…まあ、とりあえず暫くはおとなしくしていきましょう。FBIからその内、また連絡が来るかもしれないから…」

「そうだな。」

コナンは笑顔を見せて、阿笠邸を後にした。

しかし―その笑顔は、後何回見る事が出来るのだろうか？

## 次なる標的

「おーい、和葉？」

翌日の早朝、平次は地下5階へと上がってきた。

「平次い？ちよつと眠くて、眠くて…ふあゝ」

いつもの和葉、平次にそう感じさせるその仕草、だが間違いなくわざとだろうと分かった。何故そんな事をするのかは全く見当はつかなかったが…

「なあ、俺は何して過ごしてればいいんや？」

「ああ。平次は…本でも読んでたらええんちゃう？書庫は…地下7階やから。」

今更だが、平次は驚く。その余りの設備の多さに。

「そうそう。このホテルの地下の見取り図、渡しとくわ。欲しい物あった時に使つてや。」

「あ、ああ…」

地下は5階、12階までが組織専用のスペースとなっていた。

書庫の他にも、ジムもあれば床屋や、日用品の雑貨店まで、様々な施設が揃っていた。

早速、平次は地下7階を目指して階段を下りようとした―が、すぐに和葉の方を向く。

「なあ、和葉―お前、まさかガリアーノちゃうやろな？」

聞くつもりは無かった。

和葉が組織のメンバーでも、どうせ末端だろうし、何らかの薬で少し操られているだけ……ガリアーノな訳がない。

昨晚、平次はベッドの中でそう自分に言い聞かせていた。

「ああ―そうやけど？」  
「っ！―！」

真相は、余りにも残酷――

~~~~~

『ガリアーノ様』

分かってしまった。和葉はただ単に組織に捕らえられて、従わされているのではなく、間違はなく最初^{はな}っから黒に染められていたのだ……恐らく、父親や、母親もそうなのだろう……

それと同時に、とてつもないショックを感じた。自分の身近にいた人の正体に全く気付けていなかった事に。いや、ショックなんてレベルではない……

「そうそう…それと、明日にはあんたの両親もここに運んでくるから…それまでは一人で我慢してるんやで？」

平次の我慢は、既に限界に達していた。

「な、何やと！？テメエー」

平次は凄まじい速度で和葉に殴りかかるべく、飛び上がった！

しかし、飛び上がった体は、宙で綺麗に回転し、地面へと真逆さまに叩きつけられていた。

かなりの激痛が走る肉体に、和葉が掛けた言葉はたった一つ――

「無理や。あんたじゃ、うちには勝てへん…なんだって、あんたの両親をここまで連れてくるのは…うちなんやからな。」

化け物 vs 化け物

「おい―遠山。どういう事か…説明せえ。」

平蔵は銀司郎を問い詰めている。自分の娘が行方不明になったのにも関わらず、さほど気にしていない態度が、余りにも不思議でならなかった。

そして、今日。銀司郎にここに呼び出された。平次が消えた、その空き地。

絶大な信頼を置く、大親友。
だが、平蔵はそれでも何とか冷静でいられた。

「そやな…説明するか…ま、それも―」

お前の後ろにいるうちの娘を倒せたらの話やけど、な。

~~~~~

「ほう…気配が消せるんか…全く気付かんかったが…」

すると、銀司郎は何故か持ち歩いていた竹刀しなを一本、平蔵に渡した。

「これで闘え。2戦中、勝ったらお望み通りやけど―連敗したら、まとめて連れて行く―これでどうや？」

2戦。この意味をすぐに平蔵は理解した。平蔵、そして静華だ。

勿論、高校生ごときに超一流の剣道の技術を持つ平蔵が負けるはずはない―だが、それはあくまで剣同士で対決したらの話だ。

平蔵は武器はその竹刀一つだが、間違いなく和葉は何でもあり。それに加え、今の和葉は尋常な能力ではない…女子高校生だとは思えないオーラを纏っているのは、理解できた。

そう考えると、互角—もしくは、和葉の方がやや優勢かもしれない。

「まあ…あんたを倒せたら、静華さんは余裕やる…ほな、行くで—」

和葉はゆっくりと間合いを詰め始めた—

しかし、平蔵は笑っていた。

「……何がおかしい。」

「フン……舐められたもんな。こんな小娘相手に、竹刀なんて使わけないやろが……」

~~~~~

確かに強がりではなかった。とてつもない速度で進む戦いを、僅かに優位に平蔵は進めていた。

一分間で平蔵は足を一回斬られたものの、ほぼ無傷。逆に和葉には何度も攻撃を喰らわせている。

―あの平次ですら、反応出来ない攻撃に、軽く反応しさらに反撃する……正に、化け物だ。

しかし、また和葉も化け物だった。

肋骨を何度も力強く平蔵に殴り飛ばされているにも関わらず、表情は全く変化しない―痛みを感じていない。

そして地には既に和葉の投げた超小型のナイフが多数散らばっていたり、突き刺さっていたり。

だが、和葉のナイフが尽きる事はまずない。平蔵の周りを飛び回りながら、ナイフを回収しているのだから。さらに切り札がまだ和葉には残されている。「スぺツナズ・ナイフ」という、最終兵器だ。

刃先を射出する事が可能で、それがかすれば、平蔵の体内へと即効性の毒が送り込まれる。暗殺時とは違い、塗ってある毒は麻酔だが、人一人を捕らえるのには間違いなく十分である。

そして、その射出はボタン一つで可能だ。だが、バレたらまず平蔵にはもう当たらないだろう。

戦場には、とてつもない戦慄が走っていた…ように見えていた。しかし、数秒後思わぬ奇襲で戦いは決着する事になる。

化け物 vs 化け物（後書き）

決戦の行方は…？次回冒頭で明らかになります。

影一つ

「平次。帰ったよ？」

平次の希望を叩き落すには、この一言で十分だった。明け方の4時だが、昨晚から寝れなかった平次。完全に徹夜である。

「えーつと… B613に平蔵さん、B614に静華さん置いてくから… 会いたいんなら、勝手にしてええよ。それと、ちゃんと寝なあかんよ？ あんたは貴重な人材なんやから。」

「おい、こら。待て和葉。」
「何や？」

聞きたかった。

「…お前。これまで、俺らの事騙してたんか？」

彼女を、黒に染めてしまった物は、一体何なのか。

しかし、フツと和葉は軽く嘲笑する。

「何言うてんの？騙してなんかあらへん……平次が何にも気付かなかっただけやないの？組織のメンバーが発する気配は流石に隠してたんやけど。殺気は隠した事はあらへんし、な。」

ドアが閉じられると、平次は力強く地面を殴りつけた。

あまりの自分の不甲斐なさに、腹が立った。
「クソッ……」

~~~~~

「終わったか？和葉？」

「うん。終わったよ…今何時や？」

「朝5時。そういえば、今日は金曜日やったな？」

「…学校は休むで。もうダメや…疲れてもつて。」

「分かった。連絡しといたる。」

そして、和葉はそのまま自室へと入っていった。

ブルブルル…

「あ？ジン？」

「何の用だ…今、忙しい事ぐらい分かっているだろう？」「ジンが低い声で言うが、そんな事全く和葉は気にしていない。」

「もう…相変わらず無愛想なんやから…あのな、東京行きやけど…明日に伸ばしてくれへん？今日二人捕らえたんやけど…ちよつと疲れたんや。」

「ほう…大阪府警、本部長か。」

「正解。まあ、流石にお見通しやるな。」

「あの小僧の父親だからな…っと、待てよ。まさかお前…使ったのか？あれを。」

「おつ。」と和葉は驚く。これを知っているのは和葉の他ではジンのみだ。あの方ですら知らない。

「フン…まあいい。倒せるに越した事はないからな。とりあえず、東京行きは明日で構わない。あの方が呼びだ。5時には間違っても遅れるんじゃないぞ。」

「え？5時って、朝？無理や無理。それじゃ今日でなアカン―」「ふざけるな。」

冗談が通じないと、和葉は不満そうな声を上げた。

「ま、ええわ。ほな、また明日。」

「ああ…」

ピッ

「あら？あなたの彼女から？」

「黙れ、ベルモット。あんな小娘に構うつもりなどない。」

ジンはかたくなな態度を崩さないが、ベルモットは続けた。

「そうかしら…あの子、年の割には結構成熟してると思うけど…」

「お前の悪趣味からすればそうだろうな。あれは確かにあの方の今、一番のお気に入りだろう？」

「そうね。確かに彼女に夢中らしいわ…」

すると、軽くジンは舌打ちする。

「ふざけやがつて…と言いたい所だがな。こんな言葉を誰かに聞かれる訳にもいかねえ…仕方なく認めてやるさ。」

「ふふっ……………っ…きつい朝日ね。」

明るい朝日を浴びるベルモットとジン。しかし、そこにはもう一つ影が映し出されていたとは、二人は思いもしなかった。

## 信じられない来客

ピンポン…

「はい。」

コナンは一人で、留守番をしていた。週刊ヨンデーをテーブルの上に置いて、扉の鍵を開ける。

「あつ！コナン君やないの♪」

「えっ！？和葉お姉ちゃん…っ！？」

大きく飛び退いた。今日は土曜日、小五郎は仕事に出ていて、蘭は普通に学校。そして、事務所にやって来たのは…依頼人ではなく、高校生で今日は学校のはずの和葉。そう―黒の組織のメンバー……

「学校は…？」

「ああ、今日はこの前の音楽鑑賞日の代休が入ってな。合気道の練習日もあらへんし、今日明日はこっちに来たんやで。」

しかし、コナンはふっと違和感を感じた。

いつもいるはずの『あいつ』がないのだ。

「あれ？平次兄ちゃんは？」

「ああ、平次は剣道の大会やで。地区予選やったし、別に行く必要も無い、ってしつこいから、いかない事にしたんよ。」

嘘だろうと、すぐに想定できた。いつもの和葉なら地区大会だろうが、なんだろうが平次の元へ行くはずだ。

すると、東京に来たのには…何かの意図がある。

しかし屈んで、コナンと同じ視点の高さになった和葉が、次に放った言葉は、コナンにとてつもない圧力を与えた。  
プレッシャー

「なあ、コナン君？これからどっか行かへん？」

奇妙な予感が、コナンの脳内を過ぎつた。  
判断を誤ると、とてつもない事になってしまつような、とてつもない予感が。

コナンの判断は――

「う、うん。いいよ……それじゃあ、米花町を歩いて回ろう?。」

「そやね。お昼になったら、蘭ちゃんが事務所に帰ってくると思っている……それまでには戻ろうな。」

「それじゃあ、僕、ちょっとトイレに行ってくるね!。」

まずは、トイレでコナンは装備を確認する。

時計型麻醉銃、どこでもボール射出ベルトはちゃんとある。

そして、現状を知らせるべく、携帯電話のペアボタンから、『灰原哀』を選択した――

## 喫茶店

灰原は、その日ジョディとの待ち合わせ時に、一枚の紙を持ってきた。そう、新たに判明した構成員のデータを灰原がまとめ直した物だった。

「ガリアーノ」遠山和葉：10歳にして組織のメンバーに入り、今はベルモット同様、あの方の側近に就く。非常に暗殺術に長けている上、脅迫その他役割は非常に多い。ジンと何らかの係性を持つ。アクアビット＝毛利蘭：中学生の時に母親の妃英理との何らかの係で組織へと入れられた模様。組織内では危険な隠密行動中心。だが、それでも普通の学生生活を送っていた。誰も監視は付いていなかったらしい。

妃英理：詳細不明。」

「って所かしら...」

簡単にジョディは灰原の手渡したデータを見て、自らまとめ直した。「そうですね。」

静かに、ジョディは溜息をつく。こんなにも組織との関連性のある人物がいたのか。

と同時に、目の前の少女がそこまで組織の事を知っている事が、やはり不思議でならなかった。

「でも...ここまで知っているあなたって...一体？」

その間には、やはり灰原は横に首を振った。

しかし、ジヨディも追及しようとはしない。

「…そうね。でも…今はいいわ。それは確かに関係ないでしょうし…」

そして、実際はもうほぼ見当はついている。組織の驚異的な科学力を考えれば、普通では有り得ないような現象も、想像する事は出来た。

『江戸川コナンと、灰原哀は、幼児化した可能性がある。』

だからこそ、追及はしなかった。言わないのは何らかの事情がある――彼らの中でのしか通用しない、何らかの事情がある。そう考えているからだった。

「…それで、とりあえずこの3人の対策なんだけど…」

「ええ。ただ、間違いなくアクアビットと、英理さんは今の時点では危害はないと思います。」

灰原は、強い口調で言い切った。

「…どうして？」

「仕留めに来ないでしょう？もう知っているんです…アクアビットは、私は組織が狙っている対象にあるのだと。」

「なるほど…すると、その母親である彼女も…一応除外できそうですね。面識はあるんでしょう？」

「ええ、まあ。」

言えない。危害を与えるのは自分自身でもあると。

「工藤新一暗殺令」を出されている、自分自身が、今この付近では一番危ない存在だと。

そう、灰原は言う事が出来なかったし、言つつもりは無かった。

「…とりあえず、最初のガリアーノ…彼女だけは、警戒しなくちゃならないわね。」

「ええ。そうですね…（プルルル…）何かしら…電話？はい…江戸川君？どうしたの…っ！？それ、本当なの！？」

「どうしたの？哀ちゃん…」

思っていたより、早く来た危険人物――  
その脅威に、灰原は完全に身震いしていた。

「哀ちゃん？」

ジヨディは、再度様子がおかしい灰原に訊ねる。

一呼吸置いて、灰原は答えた。

「ガリアーノが…近くまで来てる…」

## 危険と隣り合わせ

はつきり言って、単独では余りにも危険な相手。

一瞬の隙を突かれて、そのまま眠らされて連れ去られてしまうかもしれないだろう。

かと言って、探偵団と行動を共にするわけにもいかないだろう。

すると…灰原しかない。この状況で頼れるのは、間違いなく彼女しかない。

（灰原？今どこにいるんだ？）

「…それじゃ、米花公園で。」

しかし、灰原は答えもせずに電話を切った。

（おいおい！灰原！！（ピッ））

「コナン君？まだ？」

和葉は、待ちきれないといった様子の声を発した。

仕方なく、コナンはトイレを出る。

「ううん。時間かっちゃって…」  
「ほんなら、もう行こか。」

~~~~~

コナンは和葉を警戒しながら、街の中を歩いていく。米花公園の方
向へ向けて。

「ねえ、和葉お姉ちゃん。こうやってゆっくり米花町を歩くのって、
初めて？」

「うーん…でも、前に蘭ちゃんに連れてってもらった時があったなあ…」

「そうなんだ……えっ!？」

まだ歩いて5分も経っていないコナンの視界にいきなり3人の集団が…

「おっ!コナン!!」

「コナン君じゃありませんか!」

「それに、和葉お姉さんも一緒だ!!」

少年探偵団だった。

「お、お前ら。どこ行くんだ？」

「あれ？コナン君こそ…仮面ヤイバーショー行くと、言ってたじゃないですか…！」

丸つきり忘れていた。そう――

~~~~~

「来週の土曜日、朝10時からだつてよ。」

「そうなんだ…コナン君も行くよね？」

「あ、ああ。ちよつと俺は忙しい…」

「あら？どうせ家で推理小説読んでるだけでしょう…探偵さん？」

「ちよつと、コナン君！少しは外にも出なきゃダメですよ？」

「行くよな？コナン…！」

「行くよね？コナン君…？」

~~~~~

そう。灰原の技の一つ、『余計な一言』のお陰でコナンは仮面ヤイバーショーに行く羽目になっていたのだ。

がしかし、これは好都合だ。このままコナンが彼らに連れて行かれれば、和葉を置いていく事も可能なのだから。

「ごめん、和葉お姉ちゃん…僕、約束してたの、すっかり忘れてて…」

「ええって、ええって！うちもついてくから！ずっと見たかったんやで…ヤイバーショー！」

「「「「え「「「」

危険と隣り合わせ（後書き）

和葉の奇怪な行動の意味とは…？

行き先

「『『『ええ〜!?!?!』』』」

4人の声が重なる。特に、一番驚いているのはコナンだ。
そう、何と凄く乗り気なのだ。すると、和葉は仮面ヤイバーについて語り始めた。

完全に、残りの3人と意気投合している…コナンは頭が痛くなってきた。これが黒の組織の重役なのか？そう考えると…あの言葉が…

『工藤新一…いつまでも、組織を…追いつけるがいい…』

これが…組織？

…しかし、コナンは頬を両手で叩く。

（ダメだダメだ！あくまで、和葉の中身は高校生であり、黒の組織のメンバーだ。高校生なら仮面ヤイバーのファンがいてもおかしくない！そうだ！これは普通の事だ！）

自分に、とりあえず強く言い聞かせてみる。

「へー！和葉お姉さん、仮面ヤイバーのファンだったんだね！」

「まあ、幅広い世代に人気のアニメですし…良く考えたら、おかしい事もないですね。」

「なあ、なあ。帰りにうな重——」

すると、和葉は元太の頭を掴んで、顔を近づけた。

「絶対にダメ。」

「は…はい…」

という事で、4人で行く羽目になった…公園とは逆方向の、そのシ
ョーに。

~~~~~

「ふう…着いたわね。」

喫茶店から、米花公園まで結構時間がかかった。だからコナンはも  
う待ちくたびれているだろう…そう灰原は考えていたのだ。

しかし、どこを見渡してもコナンはいない。

何故？

その時、頭の中にあの言葉が蘇ってきた――

『わーっ たよ…行けばいいんだろ。行けば。』

（まさか…）「ジョディ先生。」

「どうしたの？」

呆れたような灰原の表情を見て、首を傾げたジョディ。

「呆れたわ…彼、仮面ヤイバーショーを見に行ってるの…」

「え」

「この前、子供達と約束してたから…多分、途中で捕まったのよ。」

二人は暫し沈黙していた。

「…行きましょう。」  
「ええ…そうね。」

目的を、再確認した。

「ガリアーノに危険な行動をさせないという事」

遅かった

「面白かったね！和葉お姉さん！」

「そやね。やっぱりこういうのって幾つになっても楽しいもんやわ」  
「……」

和葉達は談笑し、コナンは溜息を突きっぱなしだった。

下らないにも、程があるというのか、何というのか。

「ねえ…和葉お姉ちゃん？そろそろお昼だよ？」

「あつ…蘭ちゃんにも会いに行かないと…なあ、皆も事務所に行く？」  
「」

探偵団達に、和葉は提案する。

「うん！歩美、行く！」

「勿論です！」

「俺も俺も！昼飯あるんだろ！？」  
「」

「昼飯は知らねえよ…」

コナンは突っ込んだが、三人は意向を変えなかった。

「それじゃ、行こか。コナン君。」

「う、うん…そうだね。」

五人は和葉を先頭に、探偵事務所へと歩を進めていった。

~~~~~

「まだ渡っちゃあかんよー!」

(何言ってるんだ…勝手に先に行ってる…)

和葉が、一人だけ先に横断歩道を渡り終えてしまった所で、信号が点滅してしまった。

という事で、今交差点の信号が変わるのを少年探偵団達は待っている。

「変わるの遅いな……」

「あれ？」

歩美は一瞬、視界に知っている人物が入った気がした。

そしてふと横を向くと…横断歩道の向こう側に、見慣れた同じクラス少女。

「哀ちゃんだ!ー!」

それにつられて、コナン達もその方向を向いた。

「あれ？その横を歩いてる…見慣れないお姉さんは誰でしょうか？」
「本当だ…俺も知らねえぞ。」

しかし、コナンにはすぐに分かった。

「ジョディ先生だな。ありや…っ」

遅かった。

コナンも寸前まで、全く気付かなかった。

黒の車体が、少し遅れて横断歩道を渡る一人の少女目掛けて突っ込

んでいた。

しかも、全く止まる気配が無い――

「哀ちゃん……！」

交差点に、一人の少女の悲痛な叫びが響き渡った。

遅かった（後書き）

灰原が……？

和葉の理由

「あ…」

歩美の叫びは、すぐに収まった。「逃げて」の一言が間に合わなかったのだ。

しかし、黒き車体が突き飛ばしたのは、灰原では無かった。

「「「和葉お姉さん！！！！」」」

そう――交差点の反対側から驚異的な速度で走ってきた和葉が、灰原を抱え込んでいた。

すぐに黒い車体はその場から姿を消した。
しかし、それには見向きもせず、探偵団、コナン、ジョディは和葉の元へと駆け寄った。

そしてゆっくりと、和葉の両腕の中から灰原が出て来る。

この時、和葉の本当の姿を知らない半分は単純に和葉を心配し、正体を知っている半分はとてつもない疑念を抱いた。

今の車が黒の組織の車である事を考えると…普通ならこんな行為には出ないはずだ。

「大丈夫ですか！？和葉お姉さん！？」

「あ…」

声は掠れている。

「しつかりして！和葉お姉さん！！」

「おい、コナン！！」

「え？」

いきなり声を掛けられたコナンは素っ頓狂な声を上げる。ずっと、和葉の奇怪な行動について頭の中で推理を張り巡らせていたのだ。

「『え？』じゃないよ！！早く救急車呼んで！！携帯持ってるよね！！？」

歩美がコナンに詰め寄ると、ようやくコナンは焦って電話を掛けた。

「とりあえず、道端に寄せましょう。ここは危険よ！」

「『『『『『セーの…』』』』」

電話を掛けているコナンを除く5人で、和葉をゆつくりと運ぶ。

「ふう…ここでもいいですね。」

「とりあえず、君達は少し離れていて。こんな物、あなた達が見る必要は無いわ。」

ジョディが言うと、探偵団は勿論反抗した。

「何ですか!？」

「和葉お姉さんは、私達の大切なお姉さんだもん!」
「いいだろ別に!！」

だが、それを強く灰原が遮る。

「ダメよ!これから救急隊員が来るでしょう?あなた達がこの付近にいると、邪魔になるわ。少し離れていて。」

「何だよ!灰原!!助けて貰ったのはお前だろ!？」

小さく灰原は舌打ちする。何も知らない子供達相手では、何も反抗する事が出来ない。

それでも、感情的になって叫んだ。

「五月蠅いわね！あなた達じゃどうしようもないのよ！！」

珍しく灰原が発した、余りの剣幕に、流石に三人も退いてしまった。

「ねえ…ガリアーノ？」

灰原は、和葉がさほど致命傷ではない事を確認すると、近付いて訊ねた。

「…何や？」

「どうして…助けたの？私を…分かるでしょう？あれは組織の車…私を殺しに来た車なのよ？助け出すなんて行ったら…裏切り者として認識されるんじゃないの？」

「ダメ…やった？」
「え？」

「人を殺す動機——うちにはあるから、そこは違つかもしれへんけど……これは一緒やった……人が人を助けるのに、論理的な思考は存在せえへんって……」

静かに呟いて、和葉は気を失った。

和葉の理由（後書き）

和葉……一体何者？

その、言葉

「でも…凄いです！交差点の反対側から、一気に走って飛び込んで、灰原さんを守るだなんて…格好いいですよ！」

「俺、本当にびっくりしたぜ…」

「和葉お姉さん、本当にありがとう！」

「そんな…でも、哀ちゃん、本当に怪我無くてよかったやん…」

何故、そんな表情を作り出せるの？

まさか…彼女…

「どうした？灰原？」

っ…

「工藤君？いえ、別に何でも無いわ。」
「そ、そうか？」

相変わらず…厄介な探偵ね。でも…これって…

最悪の展開…？

ただの…私の思い違い……？

ちょっと待って。そもそも…
『…人を殺す動機—うちにはあるから、そこは違つかもしれへんけど…これは一緒やった…人が人を助けるのに、論理的な思考は存在せえへんって…』

殺す動機―それは彼女が暗殺している事を示すとすると…
これは一緒だった…って…

この言葉は誰かの受け売りって事？

まさか…

~~~~~

その後、和葉は驚異的な回復速度を見せた。  
車に衝突され、普通なら死んでもおかしく無い程の衝撃を受けた  
にも関わらず、命には別状は無し。

医師も「信じられない」としか言いようが無かった。

そして、僅か三日で和葉は退院。

『退院おめでとう！』の、垂れ幕の下がった阿笠邸で、ささやかなパーティまで開かれた。

「…ありがとう。」

見送りの際に、静かに灰原は呟いた。

「ええって…あんまり気にせんといて。」

小学生へ対してではなく、和葉は組織の一員のシェリーとして見て、  
答えを返した。

そして、それをまた灰原も高校生の和葉ではなく、組織の一員のガ

リアーノからの言葉として受け取った。

――瞬止まった歯車は、また回転を始める。

## その、言葉（後書き）

1章終了です。

次回冒頭でいきなり謎の人物が現れます。お楽しみに。

## 闇の中の密談

「え？寸前で連絡が来てたの？」

「ああ……自ら電話で行くと言ってきたから大丈夫だと思っていたが……予想外だったな。」

しかし、今日は珍しくベルモットが怒っている。

「あのねえ……一応ちゃんと確認して頂戴。」

「ああ……っ」

ゴホゴホとジンが咳をするのが、ベルモットには聞こえた。

「あら……珍しいわね。風邪引いたの？」

「……ああ。」

それに加え、やや落ち着いた、ジンらしくない声を発している。

「まあ、いいわ……今日は一人で行くから……それじゃあまた。」

ピッ

携帯の電源を切ると、ベルモットは視界に入る扉にゆっくりと触れる。

すると反応して、ゆっくりと開き始めた。

その先には一人の男が座っている。

「待っていたよ。ベルモットーん？ガリアーノは一緒じゃないのか？」

「……すみません。ジンの手違いで、連絡が甘かったようです。」

「ううん。違うよ……」

ベルモットは頭を横に向ける。

―そこにいる。幼くして、あまりにも強大すぎる脅威が。

「ガリアーノ、多分作戦を決行したんだと思うよ。それも―」

「こらこら。もう寝る時間よ？早くベッドに行きなさい。」

しかし、後方からの母親の声を聞くと、「はあい」と返して、奥の扉から消えた。

「……」

「すまないな。相変わらずの性格でね……」

「いえ。構いません。ただ……」

圧倒的な威圧感をもつ、その少女に恐れを抱く者は多い。

「…分かっているよ。あの年齢であそこまでの圧力<sup>プレッシャー</sup>を相手に掛けられるのは、ただ彼女が特異な存在であるだけだ。私達は何も影響を

与えていないのに、な…」

「それで、今日はどのような御用で…？」

ベルモットは、最も気に掛かっていた事を、ここで訊ねる。いきなりガリアーノとベルモットだけを呼び寄せて言う事だから、何かしらの事情があるのだろう…

「……いや、ガリアーノがいないのならば…残念だが、今話すわけにはいかないだろう…申し訳ないが、今日は帰ってもらう必要がある…」

「…分かりました。」

「おっと！そうだ…」

しかし、ベルモットがそう言って、その場を去ろうとした直後に、男は大事な事に気付いた。

「折角だから、軽く彼女と遊んで行ってやってくれ。なあに、心配は要らない。あくまで子供だ。普通に接してくれて構わないからな。」

勿論、すぐにベルモットは—

「了解しました—スピリタス様。」

## カシス

コードネームはあるが、まずそれを知っている人間は非常に少ない。彼女はカシス―まだ7歳だけど、組織の中で貴重な存在として、扱われているわ。

何故、幼くしてコードネームを手に入れる事が出来たか…それは、彼女の特殊な能力にある。

確かに頭の切れも並みの小学生よりは一步、上を行くだろう。だが、それ以上に人間技とは思えない特殊な力を持っている。

『相手の次の行動を読み取る能力』

さらに、それを生かす為の情報処理能力にも長けているの。そう―次に対象者がどんな行動をするかを推測する。その的中率にも相当優れているの。

組織が痛いミスをやらかさない原因は、正に彼女にあるって訳ね。そう、ジンが大胆な行動に出る事もあるけど、それも彼女がある程度の相手の状況を理解して、推測しているからこそ出来る事。

でも、表向きは普通の小学一年生。知識量だってさほど大した事は無いし…まあ、一つ的能力だけで、食って行ってるみたいな感じね。

本名は―私も知らないわ。偽名が『美代』だって事ぐらいね…

「美代ちゃん？」

「なーに？お姉さん…そうだ！ねえ、おままごとしよ？」

思えないわよね。

これが本当に『組織の生命線』であるだなんて。

「ええ…」

つと…もう一つあったわね。彼女の特徴…

そう、対象者を綺麗に染めてしまう驚異的な影響力…

これは私も良く知らないけど、彼女の言葉が周囲に与える影響は、とても強力な物があるらしいわ…

そう―黒ずぐりを原料とした、甘みの強い深紅のリキュール…

言い換えると、周りを朱に染め上げる、とても甘い力を持つ黒き組織の少女…それが正にカシス。

大丈夫かしらね…シルバーブレッド銀の弾丸も…

## カシス（後書き）

次回は大阪に戻ります。

行動開始（前書き）

急展開に……

## 行動開始

「それじゃ、行ってきます。コナン君も元気でね？」  
「うん！」

「ふう…1時ね。」

和葉ちゃんが車に轢かれるという事故から約1週間が経った。

その中で、一つ異変があった。

―服部平次が、失踪してしまったのだ。

和葉ちゃんは「きっと大丈夫やって！新一君みたいに事件追いかけてるだけや。」とは言ってはいるが…

違う。何が起こってるかを知っているのは和葉ちゃん―いいえ、ガリアーノしか居ないの。

だって…彼女がオーナーをやっている、あのホテルの地下に閉じ込められているから―

でも、それが分かったからどうこうできる問題ではない。鍵が無ければガリアーノの許可が出なければ私は入れないし、入れたとしてもその後服部君を連れて…いいえ。ご両親も一緒に連れて抜け出せるとは思えない…

それなら、やるしかない。成功率は決して高くないけど…彼女を、逆に封じ込めるしか方法は無い。  
そして、鍵を手に入れる…  
そのために…手荷物はもう一つ増やして来たんだから…

~~~~~

帝丹高校3年生は、修学旅行に行っていた3泊4日。行き先はかなり揉めた。鹿児島、東北地方、北海道、沖縄…

が、最終的には園子の意見「ああ京都・奈良よもう一度」で決まって、現在に至るといわけである。

この日は日付も変わり、最終日…1時になっても五月蠅い男子生徒。それに気付かれないように、こっそりと女子生徒の部屋を蘭は抜け出す。

しかし、抜け出した瞬間だった――

「蘭、どうしたの？」

蘭の目の前に居るのは、園子。トイレから戻ってきた所だった。

「あ、うんうん…ちょっと、外の風に当たりたくて。」

「へえ…大丈夫？それでも悪かったら、新出先生の所に行った方がいいと思うよ？」

「うん。分かってる…」

やり過ごした。

そして、蘭はホテルを出て――大阪へ向けて、ゆっくりと隠れながら行動を開始した…

もう一つの影

「脱出…しないやと？」

「ああ…そうや。こうなってしまったからには、脱出出来へんやろ。例え抜け出せたとしても、この組織にまた捕らえられるのがオチや…出来る限り巻き込む人の数を減らしたいのもある。」

平蔵は頑なな態度を崩さない。

「何ぬかしとんじゃボケ！！いとも簡単に捕まっておいて…『脱出はしない』やと！？ふざけとんのか―」

次の言葉を待たずして、平蔵は平次を殴り飛ばした。

しかし―平蔵も何も言う事は出来無かった。自分の不甲斐なさを、ただ息子を殴り飛ばすという行為で、解放しただけだった。

そんな下らない行為をするような平蔵では無いのだが、それ程の悔しさと、情けなさを痛感していた―平次と、同様に。

「もうええ…帰れ。自室にな。」

「クソが…ええわ！オカン連れて二人で抜け出したる！！見てろ！このクソ親父！」

平次は、ドアを荒っぽく開けて、足で蹴って閉めた。

「フン…勝手にすればええ…」

力なく、その言葉は部屋の中で、響いた。

~~~~~

「さてと…後は時間稼ぎやな。」

平次ももう脱出トリックは出来上がっていた。

後は、どれだけ時間を稼げるか。バレない様に、どれだけ時間を潰せるか？

その時間の長さによって、逃げ切れるか逃げ切れないかが決まる…  
勿論、長い方がいい。

時計は、2時を回っている。

「ふう…そろそろ…寝なあかな…」

そう言って、平次がベッドに潜り込む―丁度その頃、和葉の自宅の前に、一人の人物の影があった。

~~~~~

「ここね…和葉ちゃん…いいえ、ガリアーノの家…」

どうやって気付かれないように気を失わせる、若しくは盗み出すか。しかし、彼女が起きてしまったら一貫の終わりだろう。服部君のお父さんまでやられてるって事は…私なんかじゃ、齒が立たない…いいえ、そもそも数年前に何度も闘り合ったけど、一度も勝った事ない…

歩く時に彼女は音を立てずに歩く事が出来る。暗殺術の初歩とか言ってるけど、不可能よ…普通は…

私にはそんな能力は無いから…入ろうとした時にはれちゃうかもしれない…

待つて。

もしかして…
これは…

~~~~~

銀司郎がドアを開けると、窓には鍵を手にして脱出寸前のアクアビ  
ットがいた。  
「残念だったわね…ガリアーノ」

「へえ…やるやん。良く見破ったやん。アクアビット…」

蘭は、そのまま和葉の寢室の窓を割り、内部に侵入した。目の前で寝ている和葉を、偽者フェイクと見破って。

「ええ…ガリアーノ、あなたなら多分私が修学旅行でこっちに来てる事を、見破ってると思って、ね。」

扉を開けたガリアーノは確かに銀司郎の姿をしている。

蘭が正門から入って来て、銀司郎を脅迫に使って鍵を手に入れるのではないかと推測して、銀司郎の姿で待っていたのだ。

本物の銀司郎は勿論、寢室で既にいびきをかいて寝ている。

ガリアーノは、ゆっくりと変装を解いていく。

「どっちにせよ、もう私の勝ちね…」

その手には、鍵が握られている。

距離は10m。蘭も俊足…この時間でも通りに出る事が出来れば車がある程度行きかっている……飛び降りれば、逃げ切れる。

それでも、ガリアーノは表情を崩さない。

「でも、一つだけ計算違いがあったようやで？」  
「何？」

「あんたの、一番間近に居た……もう一人のうちの存在や……」  
はっと、蘭は後ろに気配を感じて振り向くが……

窓に足を掛けていた蘭が、部屋の中へと蹴り落とされる。

その衝撃で落ちた鍵を、蘭を蹴り落とした人物は拾った。

「ふふっ……残念やったな。これは……渡さんで、蘭ちゃん♪」  
目の前には、何故かライフルを構える和葉。

そして、蘭には分かってしまう。これが誰なのか――  
一番、信じたくない人物であると、分かってしまった。

組織内でも、有数のスナイパー……ここ数年は、姿を隠していた――

「園子っ……いいえ……スティングガー！」

## ステインガー

「ステインガー…来てくれたんやね。」

「ええ。まあね…」

変装を解きながら、和葉へと近づいていく園子と、和葉の何気ない会話。

それが、あまりにも蘭からすれば辛い物だった。

「まあ、もう帰ってええよ？あ、鍵は返してな。」

「え？何言ってるのガリアーノ？誰も―あなたを助けに来たなんていつてないでしょ？」

すると園子は和葉を力強く蹴り飛ばす！

「っ！！」

が、和葉も素早く隠し持っていたスペツナズ・ナイフを園子へ向かって発射する！

「あら…当たると思った？」

ドオン…

しかし、いとも簡単に園子はそれをかわし、和葉の脳天に蹴りを加える！

「っ…」

さらに、間髪入れずに園子は和葉の右足へと隠し持っていた拳銃で

銃弾を撃ち込む！！

「蘭！逃げるよ！！今の内に！！」

「え？ええええ！？」

未だに状況が掴めていない蘭は、園子に引っ張られるがままに脱出した…

その直後、ようやく騒ぎを聞きつけた銀司郎が到着した。そして、和葉を見て素早く駆け寄る。

「大丈夫か！？」

「う、うん…大した怪我やあらへん…やけど、やられてもった…」  
「え！？」

「鍵…持ってかれてもったわ…」

~~~~~

「えっ…それじゃあ…」

「ええ。私も隠れていたわ…ガリアーノ、あなたを本気で殺そうとしてたからね。あそこで出て行ったのよ…」

「っ！？殺す…？」

信じられなかった。この前だって会ったばかりだ…何故、いきなりそのような行為に走ったのだろうか？

「…じゃあ、ステインガーは…」

「園子で良いわよ…ずっと、私と蘭は親友でしょ？ずっと、ずっと…何があっても、ね。」

その言葉だけで十分だった。

「園…子っ…」

蘭は泣いた。久しぶりに、信じられる人間が現れた事が嬉しくて、ただ泣いた。

夜明けは、もう近い。

最終兵器

「蘭、立てる？」

「う、うん…」

「それじゃあ、そろそろ救出に向かいましょう？ガリアーノが、一瞬でも気を抜いたら…ゴ—よ。」

「そ、そうだね。」

~~~~~

ガシャン！！

「ああ…和葉が帰ってきたんか…」

4時台。まだまだ陽は昇ってこない…まあ、地下だから関係は無いのだが。

しかし、凄い勢いで何者かが廊下を駆けている…しかも、二つ同時に足音が聞こえてくるのだ。

「あー…もう！寝れんやないか！…」

たまらず、平次はドアを開けた。

「おい！こら和葉と…五月蠅…」

「服部君…ここだったのね！…」

「…毛利の姉ちゃん…？どうして…」

パン…

そして、平次は耳を塞ぐ。

平蔵とは反対側の隣の部屋から、何者かの断末魔が聞こえてきた…

そして、その部屋からまたしても知っている女性が出て来た。

「…な…」

「いたわね。大阪の色黒男…とりあえず、逃げましょ？」

しかし、服部はその場で聞いた。

「おい…まず、どういう事が説明せえ。それが先やる？あんたが敵か味方かも分からんこの状況で、のこのこと付いていくわけ無いやろ…まあ、組織のメンバーやっちゅう時点で敵やろうけど？それに今、誰か撃つとったみたいやしな…」

だが、園子は笑い返す。

「ふふっ…馬鹿言わないでくれるかしら？あなたが和葉ちゃん…いえ、ガリアーノによってとんでもない危機に立たされている事は、こつちも知っているわ。私はスティングァー、蘭はアクアビット…蘭はともかく、私はもうこの組織を裏切ったわ…そして、いつか潰す為に、隠密に活動が続けてきた…そして、今回も私の正体は誰にもばれないはずよ…一応、隣の部屋のキャンティを殺しておいたから、今私が侵入した事を知っているのはガリアーノだけのはずだけど…」

「…っ！」

ヒュン！

いつもの投げナイフが飛んできた…間一髪で、蘭は平次と一緒に部屋へと逃げ込み、ドアを閉める。

そして、逆に園子は立ち向かっていった。

「ふふっ…そうよね。絶対にこの件をあなたなら表沙汰にはしたくないはず…誰にも連絡せずに来たんでしょ？ガリアーノ…まあ、時間をおいてから飛び込んでくる事を読まれてたのは想定外だったけど。」

「勿論…まあ、ここであんたを殺すわけにはいかへんし…とりあえず、捕縛させてもらうで？」

次の瞬間、ガリアーノとスティングーは同時に間合いを大きく詰める。

そして、ガリアーノが相手の死角に入り込んで―まず一撃。

しかし、その瞬間にスティングーもガリアーノへとカウンターを加え、突き飛ばすと、叩きつけられたガリアーノへ向けて、拳銃を乱射した。

「くっ…」

「どうしたのかしら…実践感覚が鈍っている私に対して…この程度？笑わせないでくれるかしらっ！」

「っ！」

さらに、ガリアーノの眼前で閃光弾を炸裂させる。

しかし、目を塞いで閃光を入れなかったスティンガーだったが…

「いない…何処…きゃっ!？」

音も立てずに、背後からガリアーノが一撃を加えた。

「ふふっ…ごめんな。本気出さなくて…でも、閃光弾はうちには聞かへんよ？そういう類の耐性は馬鹿にならないくらい高いんだ。」

スティンガーは、言葉も発せなくなっている。

「もしかして…さっきの一撃で背骨、いっつもうたん？」

不気味な笑顔で、ゆっくりと再びガリアーノはスティンガーへと迫る。

「違…」

「え？」

「違うわ。どんなに強い一撃を与えても気絶しそうに無いあなたを倒すには、殺すしかないって事に、腹が立っているのよ…最初から分かってたんだけど、私は何とか誤魔化そうとしてたみたい…数ヶ月の間、友達だったのに…残念だわ。」

彼女は特殊な形状のライフルを取り出す。  
いやーライフルではないか。

しかし、その正体をすぐにガリアーノは見破った。

「くっ…!」

それと同時に、素早くそれをずらそうとするが…

「遅い。もうチャージは完了してるんだから…」

無慈悲な閃光は、とてつもない轟音を立て、綺麗に廊下を貫いた。  
—そこには、何も残っていない。

## 最終兵器（後書き）

和葉は…？

## 死者と、恨みと

やってしまった。

この火力の扱い―久々で、人間をギリギリで死なない程度を、計算できなかった。

「…スティングー…まさか…」

「…ごめん。こうするしか…」

いくら敵でも、親友だから。

何て事をしてしまったのだろう―

『ふふっ…後悔してる暇なんて、あらへんよ?』

「…!」

「な、何が起こってるんや!？」

服部君が全くついていけない…けど、それより…  
どうして、スピーカーから彼女の声が!？

そう思った―次に、私が見たのは―

「早く逃げて!!アクアビット!服部君だけでいいから!!」

「な、何が…ウッ…」

アクアビットが、平次を気絶させる…それでいい。早く抱えて逃げないと…

後は、私がひきつけるから―

「ステインガー…ステインガーも逃げて!!」

「無理よ…こうなっちゃったら…ほら、来たわ…服部君のお父さんとお母さんは、諦めるしかないわね。」

やっぱり。あの時、最後に…小さな人影が見えたと思ったのよね…

もう、無理よ。私は…

「蘭。任せたわよ。」

~~~~~

「ガリアーノお姉さん、終わった？」

ゆつくりと、少女は横から出てきた。

「勿論…でも、助かったで。そこにおつたなんて…吹き飛ばされたうちの、処置もしてくれるなんて…ええ子やなー…」

「そ、そうかな？…でも、このお姉さんはどうするの？」

ガリアーノは「んー…」と唸りながら、しばらく考えていた。

「そやなあ…ホテルじゃ危ないやろし…もう、連れてってええよ？」

「えー！？やだよ…お父さん、きつと殺しちゃうもん…ねえ、お父さんには、ガリアーノお姉さんは何も悪くないよ、って言うておくから…お願い。」

今にも泣きそうな表情で少女はガリアーノの方向を見る…

ガリアーノは少し思考を張り巡らせてみる。

もしもこのホテルの存在が平次から明らかになったとしても、まだ何も起こらないはずだ。

というよりは、明らかになったら燃やしてしまえばいい…平次は組織の存在を知っている。そういう手法を取る事は分かっている。

だから、この事を警察に連絡したりはしないはずだ。

「そ、それもそうやね…やったら、もう解放してやってもええかな…何処の旅館やったっけ？」

「確か…ここだよ。」

いきなり表情が明るくなった少女は、地図を取り出してガリアーノに見せた。

「…分かったで。今から、届けてくるから…ボスの方は頼んだで？」
「うん!!」

~~~~~

ガチャ…

「ただいまー…あれ？」

お母さん…朝食の用意、まだなんやらか…  
起こしに行かないと…

ガチャ

「お母さん、お父さん……っ」

嘘や…

嘘やろ…？

そんな…そんな事が…

「お母さん!!お父さん!!」

…っ…もう…

誰や…一体…

まさか…この殺し方…

「  
ツ  
」  
.....  
「

## 死者と、恨みと（後書き）

ここで、話は折り返しを迎えます…銀司郎と、その妻については、現段階では何もコメントは出来ません。（諸事情有）

後半に突入しますが、結末で大逆転が起こるという事は予告しておきます。かなり暗い話ですが、最後の最後で…

それでは、これからもよろしくお願いします。

## 奇襲の女弁護士（前書き）

3章突入です。一気にこれまでの謎を解き明かしていきたいと思  
います…

修正：最初の話が抜けてました。

## 奇襲の女弁護士

（なあ…灰原。まだあつちとは接触してこねえのか？）

（あつちつて…ああ。ガリアーノの事ね。）

（そうなんだよな…気になって仕方なくてよ。何時、こつちに来るかもわからねえ奴だ。一気に襲撃されたらひとたまりもねえし…そうだ、灰原。）

（え？）

コナンは、突然妙な事を灰原に聞いた。  
（オメーなら……だったらどうする？）

（そう、ね……って感じ……あんまり考えたくないけど、こつするかしら。）

（そっか……サンキュー）

「あー！コナン君達、またひそひそ話してるー！！」

「ご、ごめん……歩美ちゃん。」

「もう…私だつて気付くよ！3人で歩いてるのに、いきなり変な事を話し出すんだもん……」

それにしても、歩美は感度がいいな、と今さらながら、コナンは思った。ひそひそ話している時に、大体最初に気付くのは歩美だ。

だから何だというわけでもないのだが。

「それじゃあ、またね！コナン君、哀ちゃん！」

「ああ！またな…灰原も、じゃあな。」

「ええ、また。」

~~~~~

「ただいまー…って、あれ？おじさん、何処？」

鍵が開いているから、中におっちゃんがいるものだと思ってたけど…

「ん？コナン…帰ってきたのか。」

何だ。ちょっと外に出たのか…

「うん。今帰ってきた所だけど…あれ？何持ってるのおじさん？」

「ん、ああ…これな。コナン見覚えあるか？」

ん…保険証か。

へえ…かなり蘭に似てるな…

「うーん…分からないけど、依頼主が落とした物じゃないの？」

「いや…俺も良くわからねえんだ。この前、掃除したら出てきたんだからな…丁度、今目暮警部に渡して、そのコピーを一応持って帰ってきたんだよ。」

「ふーん…そつか。」

まあ、そんな簡単には見つからないかもな。こんなに情報が少ないんじゃない…

カチャ

おいおい…

マジかよ…

「二人とも、動かないでくれるかしら？」

「な……」

……英理さん……何であんたが……

新たなる真実

「おい！英理…どういう事だ！？」

英理は、コナンの首を締め付けるように抱え上げて、銃口を小五郎へと向ける。

「どういう事…って言われても…私は、ただの組織の使いよ。あなたを殺す為の―」

「っ…！」

「そして、この子を連れてかなくちゃいけないわ…江戸川コナン君。」

僅かに、コナンの頭を過る物があつた。

だが―コナンからこれを聞くわけにはいかない…いや、聞けない。もしも本当ならば……

「デメエ…英理じゃ―」

「『英理じゃない？』…あなたは、自分の妻の姿すら分らないのかしら？」

（こいつは…本物か…）

コナンは冷静に状況を考えようとするが…

「そうそう…あなた、蘭は暫く帰ってこないわよ？人を殺すので忙しいんだから…」

虚言を聞き流そうと、必死になる小五郎。
しかし、コナンは全てを感じてしまう。

nightmare
悪夢のような、展開を。

「くっ…まさか―」

「そうよ。もういいかしらねえ…『工藤新一君』?」

次の瞬間―コナンの方向を見ながら、英理は銃弾を放った―

「ぐあっ…」

しかし、撃たれたのはコナンではない。

強く小五郎が叩きつけられるように倒れこんだ。

「おっちゃん！くそっ…このっ…」

「馬鹿ね…どうして、あなたは気付かなかったのかしら？こんなにすぐそばに、組織の手掛りとなり得る人物がいたというのに…」

英理が恐ろしい笑みをコナンに向けて浮かべる。

「黙れ…」

「あら？それとも…蘭が組織の一員じゃないとでも言い張るのかし
—」

「ふざけんじゃねえ！絶対に…絶対に、俺は信じねえぞ！」

コナンは、自分の弱さを曝け出しながらも、叫んだ。
人として、信じ難い事実を受け入れられない、その弱さを。

「ふふふっ…どんなに頑張っても現実には覆られないわ。さあ…分か
ったら、あなたは…連れてってあげるから。ほら…」

すると、英理はコナンを丁寧に縛り上げていった。

「なっ…」

「口だけは残しといてあげる。もしも突然暴れだした時に、ジンに
銃で撃たれたあなたの断末魔を聞けないのは悲しいし…」

「ジン…!!」

そして、小五郎を放置して事務所を出ると、黒のポルシェへとコナ
ンを放り込んだ。

「くそっ…」

「久しぶりだなー工藤新一。」

全てが、残酷な方向へと進んでいる。

愛しき人が、暗闇に染め上げられていた事――

母親も、また暗闇の中の人であったという事――

だが、全ての残酷な真実がコナンの脳内で紡がれて―生まれた新たな真実が、コナンを奮い立たせる。

―まだ、闇の中に僅かに光が射し込んでいた。

容量不足

「それやったら…姉ちゃんは…」

「うん。分かった？服部君…とにかく、私はもういかなくちゃいけないけど…出来る限り、隠れていてね？」

すると、蘭はあっという間に走り去って行くとする。

「ちょっ！待ち！」

平次が呼び止めた。

「な、何？」

「……いや、何でもあらへん…やけど、俺もついてく。工藤の事が気になるんでな…やから、一緒に行かへんか…あれで。」

平次は、自分の持つ自動二輪の方を指差した。

「ありがとう…服部君。」

蘭は、平次の手を強く握り締めて、二人でその方向へと向かった。

―守るべき者を持つ少女と、取り戻すべき者を持つ少年が、一つになって―運命は変わるだろうか？

~~~~~

その黒きポルシェに乗せられて、コナンは連れて行かれた。

「おい、メスカル。シェリーが住んでいる家はここで合ってるのか？」

「ええ。そうよ…私が迎えに行きましょうか？」

しかし、ジンは自らドアを開けた。

「いや、俺が行く…そっちの方が、奴が絶望するだろうしな。」

「ふふっ…でもそうね。私が組織の一員だって事は、もう彼女にはバレてるでしょうし…」

静かに、コナンは舌打ちした。

（クソッ…灰原。そんな大事な事隠してたのかよ…！）

真実が分かった今、コナンの脳内ではなんと、蘭と英理が組織の一員だったという事実は、逆に何も問題が無い事として成り下がっていた。

それ以上に、コナンはその先を見据えている。ジンなど…眼中にも無い。

「ほらよ。」

次にジンが戻ってきた時には、やはりぐったりとした様子の灰原が抱え上げられていた。

メスカルがドアを開けると、ジンはコナンの方向に、灰原を投げつける。

「いいか、お前ら…少しでも喋ってみろ。撃ち殺すぞ?」

そして、ジンはドアを閉め、自分の座席へと乗り込んだ。

「さてと…ガキ共。もしもお喋りしないで…この車の中に30分間いられたのならば…ボスまで案内しよう。そして喜べ。直々に俺が撃ち殺してやるさ。」

恐ろしい、冷たい微笑を浮かべるジン。

—強くそれを睨み返すのはコナン。

―その笑みに、恐怖を感じ怯えるのは灰原。

「それより…ジン。アクアビットは…」

「ああ…奴か。フン、言うまでもないだろう？ 処分だ。」

「…仕方ないわね。」

英理は、少し辛そうに呟くが、その方向を再びコナンは睨む。

「あら…どうかしたのかしら？」

「どういう人間だ…お前。自分の実の娘の命より、こんな組織の方が大事だったのか？」

「……」

「答えるよ。このろくでなしめ。それとも何だ…もしかして…容量<sup>メモリ</sup>不足で、返答が不可能だったのか？」

パァン

ジンの放った銃弾は、コナンの頭部横10cmの所に一発。  
そして、英理の膝元にも、一発。

「五月蠅え！ 静かにしやがれ…メスカル、お前もだ！」

「え、ええ。ごめんなさい…」

だが、コナンは確信した。この勝負に、逆転はまだまだ有り得る—  
と。

## 容量不足（後書き）

この「容量不足」…ポイントです。終章のキーワードの一つです。

## 最後の場所へ

ガチャ

扉を開けてから数秒後、二つの轟音が建物内に響き渡った。そう、どちらも小学生が叩き落される音。

「しばらく、ここにいろ…脱出しようだなんて、考えない事だな。」

「は？脱出…ははっ…笑わせるぜ。お前なんざいつでも吹っ飛ばせるのに、今脱出なんてするわけないだろ？」

（ちよっと！工藤君…）

「…ほう。面白い…」

ジンは、相当頭に来ていながらも、耐えて拳銃をコナンに向ける。

「いつでも来い。確実に殺して見せる。」

しかし、ジンがそう言つと、コナンは信じられないような事を口にした。

「なあ、ジン。シェリー酒持ってきてくれねえか？」

「…馬鹿にしているのか？」

「持って来れないのなら、見せられないな。どうするのかは…」

すると、ジンは外にいるウォッカに、「シェリー酒の瓶を持って来い」と命令した。

「あとは…」

「おい…工藤新一。馬鹿にするのもいい加減に―」

「あんたの名前、ジン―ジンは無いか？」

時間が、硬直した。

「……」

「ちよっと…工藤君？さっきから一体…」

「灰原。まだわからねえか？容量<sup>メモリ</sup>不足なんだよ…」

「っ！！」

全てを、灰原も理解した。

「よし…ジン。どうだ？出来るか？」

しかし、その返答が返って来る前に…

ジンの首は宙を舞っていた。

「なっ…」

そして、突っ込んでくる一人の女性…足音も立てずに指先が、鋭く尖っている。

「ガリアーノっ…工藤君！逃げて！」

両親をジンに殺され、怒り狂うガリアーノだった。

しかし、コナンは逃げない！

ガリアーノはコナンの首に手を掛け……

プスッ……

ボタン……

切り裂く前に、その場に、ガリアーノは倒れ込んだ。  
恒例のアイテム……麻醉銃……だが、コナンは今日、それを5発分ケースに補充用を持ってきている。

「さてと……行くか。灰原……」

「……ええ。そうね。」

彼らは、部屋を飛び出した。

全てを支配する者の部屋へと向かう為に――

工藤…優作？

隠密行動を続ける二人。間違っても、見つかつてはいけない。

監禁されかけた部屋は3階。このビルは9階まであるようで、そこが恐らくボスの部屋なのだろう。

だが、余りにも護衛が多すぎる。一筋縄では行かない。

しかし、それでもジンから手にした武器―拳銃、ライフル、小型ナイフ…ある程度の護身兵器は、二人とも身につける事が出来ていた為、護衛を倒す事は出来た……と言っても一人だけだが。

そして―

~~~~~

「分かりやすいじゃねえか…な。灰原？」

「そうね…ここしか、無いって感じよ。」

9階――

「…開けるぞ。」

「ええ…」

ゆつくりと、大きな扉をコナンと灰原は同時に開いた。

「……来たか。」

その男は――

「…久しぶりだな。新一。」

工藤優作――世界中で大人気の、推理小説作家。

最後の戦い

「どうした…驚きすぎて言葉も出ないか？」

目の前にいるのは、工藤優作。工藤新一の父親だ。

そして、江戸川コナン「工藤新一…もしも、立ち向かっている組織のボスが、工藤優作ならば…」

普通ならば、絶望へと叩き落されるはずだ。

だが―

「黙れ。この仮想世界の支配者―超絶的な悪趣味、スピリタス。俺らが何をしていたか全て知っているくせに…良くそんなふざけた事が言えるな？ 散々人を殺しておいて…まだ何がしたい？」

すると、男は笑い出した。

「ふふふ…ははは！！良く知っているな、工藤新一君…全て分かっているのかね？」

「ああ。勿論…この世界は、俺と灰原とお前だけを取り込んだ―クローンの複製物クローンによる擬似の世界…そして、ジンのメモに書いてあったが…ボスの名前はスピリタスらしいな？」

「散々やってくれたじゃねえか…和葉ちゃん、園子、蘭、英理さん…次々と人間に組織のメンバーの設定を割り振っていきやがった…」

まあ、灰原が怪しむはずも無いよな？本来ならば、ちゃんとガリアーノだってアクアビットだって、メスカルだって存在するんだ…だろ？」

「そして、何回か俺の質問に奴らが答えられなかったのは…プロگرامしてなかったんじゃないかって、恐らく容量^{メモリ}不足で、やや曖昧になってたんだろ？その辺が…それに、大胆な行動を取ってるのに、周りの人々は誰も気付かない…へっ…全部、お前が勝手に妄想して起こしていた出来事だったんじゃないか。」

「…欲しかった。」

「は？」

いきなり、男は話し始めた。

「欲しかったんだよ。私の思い通りに行く、完璧な世界が。そして…私の望みを最終的に全てかなえてくれる、完璧な世界が。」

灰原は、鋭く言葉を放つ。

「異常ね…」

「ああ…」

「そんな時…シェリー。君が幼児化している事に気付いた…そして、君の最大の支えである…工藤新一を撃ち殺してもらおうと思ったわけだ。」

「…だが、予想以上に君達は素晴らしい素材だったよ…まさか、ここまで気付くとは…思ってもいなかった。」

全てを話し終えた、男は…笑っていた。

「さてと…もういい。とにかく、俺と灰原を元の世界へ戻してもらうぜ？けど…ここで殺されたら本当に現実でも死んでしまうみたいだしな…そして、お前には死んでもらわざるを得ない。俺らの事を知っている人間が、組織側に存在する事…それだけは避けたいからな。悪いけど…な。」

コナンも躊躇う。殺人者となってしまう事に。
どうしようもなかった。大切な物を守る為に…フライング余計な意地を切り捨てた。

だが、男は再び大きく笑った。

「工藤新一君…面白い！実に面白いよ君は…ふふふ…そこまで推理できていて、私が最後に望む事が分からないとは…面白い！」

「なっ…」

終極へ――

「くっ……」

後ろを見ると――

「コナン君？ダメじゃない……こんな所に来たら。」

「コナン君……ふふっ……さっきは、変な物、うち込んでくれたみたいやね。」

和葉と蘭が立ち塞がっていた。

そして、蘭は灰原の頭部へと拳銃の先を突きつけている。

「くそっ……」

「ふふふ……途中で、アクアビットには一緒についてきていた君の親友……服部平次君も殺しておいてもらったよ……さて、それではシェリ……そろそろ時間だ。殺してもらおうか。腰につけている君の拳銃で。工藤新一が、全てに裏切られた証を、工藤新一に刻み込む為に――」

灰原は、ゆっくりと怯えながら、腰から拳銃を外す。

背後からは、すぐにでも蘭が打つ構えをしている……銃をはじいたとしても、体術で殺されるだろう。

そして……和葉も居る。

「どうだ…シエリ。感じるだろう？裏切り者になってしまった事への、罪悪感を…ふふふふ…お前があんな事をしなければ…彼は死なずに済んだのだよ。」

「違う！」

コナンが叫ぶ。

「な……」

「そんなわけねえよ……お前がいて、助けてくれたからこそまで来てんだー諦めるな灰原！あんな奴の言う事なんか聞くんじゃねえ！」

「工藤、君……」

今にも泣きそうな表情の灰原。

だが、それを見て男は腹を立てた。

「ふっ……全く……そうそう…それと、ガリアーノ。あれを見せたまえ……」

すると、和葉は…

「…分身…!?」

いきなり、歩きながら複数の姿に分かれ、コナンの周りを覆い始めた。

「くっ…」

「さてと…分かったかね？君には逃げ場は無い…死んでもらおうか！…いや、証明できる物ならばしてみろ…全てに裏切られても、真実はいつも一つであるかどうか！」

そして、終極へ―

終極へー（後書き）

ここまでお付き合い頂き、ありがとうございました。

あと少しですので、よろしく願いしますm——m

灰色

（オメーなら……だったらどうする？）

（そう、ね……って感じ……あんまり考えたくないけど、こうするかしら。）

『オメーなら、もしも最後の最後で敵と向かい合ったとして、自分だけが銃を所持していて、何処を撃つべきか……って感じだったらどうする？』

『そう、ね。取り敢えず相手の力が掛かっている方向……大体、利き腕側ね。その方向に相手が避ける事は多いから……相手の頭部の、利き腕側の端の方を狙い撃つ……って感じ。こんな事あんまり考えたくないけど、こうするかしら。』

~~~~~

綺麗に、コナンは銃弾を避け――

灰原を捕らえようとする蘭に、麻酔銃を撃ち込んだ。

「あ……」 「……灰原。ありがとな。」

コナンが、静かな笑みを浮かべると、灰原も笑みを浮かべる。

「ええ……！」

そして、二人は僅かにキスをして、再び男の方向を向いた。

「くっ……だが！まだ終わってないぞ……来い！ウォツカ、キャンティ、  
コルン、メスカル……ジョディ捜査官もだ！」

「くっ……！」

「くそっ…あの人まで、取り込まれてやがったか…」  
コナンも、灰原も舌打ちする。ジヨディは流石に考えなかった。  
そして、ただでさえ和葉に囲まれているこの状況…こればかりは  
絶対絶命だ。

「さあ…行けえ！行くんだ！！」

ウォオン……

「な…」

全てが、消える音。

「なああああ!？」

一瞬にして、建物も、人も。  
全てが、消え失せた。

世界が、灰色と化した。  
―残っていたのは、コナン、灰原、そしてスピリタス。  
つまり、ゲームオーバー……

## 決着

「くそがああああ!!」

男は、拳銃を取り出し、コナンと灰原へ向ける。  
だが――

「黙れ。この悪魔め……行くぞ灰原!!」

「ええ……」

コナンが、どこでもボール射出ベルトから、ボールを発射した。

「な……」

男も、知っていたとはいえ、ベルトからボールが発射された事に、  
一瞬驚き、躊躇ってしまう。

そして、間も空けずにコナンと灰原はキック力増強シューズでボールを――

蹴った。

「「行っけえええ!!!」」

~~~~~

男は、首を凄まじい威力で強撃され、その場に沈んだ。
—もう、息は無い。

「…灰原。お前、最後の『行つけえええ!!』…」
しかし、その話題に触れると灰原はいきなり不機嫌になった。

「何よ…馬鹿にしてるの？」
「いや、子供っぽくて良かった、って言いたいんだよ…：…やっぱり、お前には人殺しなんて合わねえ。いつも、あの時みたいにこうして笑顔でいなくちゃダメだ、ってな…まあ、こいつは殺しちまったけど…いや、人じゃねえよ。こいつは…人じゃねえ。もう人間としての感情を全て失って、取り戻す事が出来なくなった…悪魔だよ。」

「工藤君…」

そして、二人は手を繋ぐ。

「さてと―帰ろうぜ。灰原…」

「ええ…！」

奥にあつた、装置から―二人は、元の世界へと生還した。
―時の経過も無く、元の世界へと。
元の日常へと…

決着（後書き）

次回、最終回です。

本当の終焉

「はあ、はあ…」

それから、3時間程しか経っていなかっただろう。男は立ち上がった―スピリタスだ。

「ふふふ…工藤新一、そしてシェリー…抜かったな。とどめを刺さないとは…はははははははは！！…いいだろう。今からお前らを、まとめて殺しに行くぞ…はは―」

спан！

「は？」

頭部と、その下が二つに分裂していた。

「な…」

「ごめんね。スピリタスさん…」

「なあああ！？」

「びつくりしちゃった？私ね、あの時、スピリタスさんが二人に装置を取り付けて、別世界へと飛び込んだときに…操作権限、奪っておいたんだー！」

「…あ…」

「だからね、私ここに入ってきたの……スピリタスさんが見てきたカシスは私だったの。凄いでしょ？」

「……」

「あー…楽しかった。ね…凄いでしょ？」

最後に全てに裏切られたような感覚でしょ？

~~~~~

「…工藤君…やっぱり休んでたのね。」

翌日、コナンと灰原は高熱で休んだ。

コナンはこっそりと、小五郎の目を盗み博士の家へと向かっていた。

「ああ…もう疲れたぜ…本当に。」

「…ねえ、工藤君？」

「え？」

縁起でもない質問を、灰原は発した。

「…もしも、本当に…現実の世界で、『全てに裏切られても』…あなたは平常心を保てたかしら？」

「…いや。絶対に不可能だよ。小さくても、人は信頼し合ってる…特に、お前は一番信頼してる…最初に、お前が操作されてなければいいと思って、全てを考えたよ…でも、本当にお前が操作されていたら…いや、それ以上は考えられねえけど…」

灰原は、くすくすと笑っていた。

「な、何だよ。」

「別に？でも…本当に、良かった。これが全て…夢で。見てはいけない、夢で。」

「…ああ、そうだな。」

全てに裏切られても―その答えを出す事は、永遠に出来ないのかも  
しれない。

だが、出さなくてはならない時が―コナンには、刻一刻と近付いて  
いる…それにはどんなに推理に優れる男であっても、気付かなかっ  
た。

結局は、スピリタスが一人死んだだけで、何も現実に影響は起こら  
なかったこの夢も―後に、とてつもない現実として襲い掛かるとは、  
どんなに推理が優れる男であっても、気付かなかった。

## 本当の終焉（後書き）

完結です！ありがとうございました！

最後の超含みだらけの結末、そしてまだ一部、明かされていない謎が明かされるー

次回作、ご期待下さい！

夢才子にお付き合い頂き、ありがとうございました（笑）  
次回作はもっと怖いです。お楽しみに。  
他作品もよろしく願いますm（――）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1495q/>

---

全てに裏切られても

2011年2月24日09時34分発行